The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	俳句
Author(s)	入江, 來布; 白井, 文渓; 山田, 平歩 他
Citation	懐徳. 1941, 19, p. 39-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大臣の訓辭めきたることなくて慈(いつくし)み深き父のごとしも
大臣も我らも同じ茶碗にてお茶啜りつつ時すぎゆくも
中庸の道おし進め經綸を行ひゆかむ大人を賴めり

○　立川三千代

おのづから顏のほてりに手をやれば手もまたあつく熱いでにけり
咳いでて寢つかれなくにこの夜らの月は明るくかたむきにけり
下りゆくみちのまがりの谷底に寥々として秋のみづ白し
とざしたる障子の外ゆ聲かけて水をもらひし禮いひてゆく
案内して進ぜまするとゝ駄菓子屋のをぢは夕餉の茶漬せはしき

萩と虫　入江來布

八紘一宇

わが國の萩やいづちに咲きつがむ
しづかにして賑かにあり萩の叢

白萩にうつろふものゝ靜かさよ
草ひろ〳〵虫も祖國と鳴きにけり
日々のいのち謝恩に虫の聲

○　白井文溪

曼珠妙華身近に迫る呪ひあり
俄雨滴る晝や桐の花
紫陽花や夢寢に色冴ゆ雨の朝
夏山や鈴音谿を荷馬ゆく

島崎藤村著夜明け前を讀んで

藪醫者の港廻りや桐の花

○　山田平歩

梅雨明けの空は秋なる夕鴉
夏山の空に行き交ふ鷺の聲

鷺低く飛び入る朝の青田哉

秋立つ日泉三郎低く見ゆ

白芙蓉一つ咲きたる朝の空

堂友會見學ノートより

村上楳宿

朱欄干金具金色に青葉橋

石楠花の崖や御堂の窓の外

木蓮の花盛りなり山の坊

御堂寂と小草茂りて青葉闇

涅槃圖や半ば剝げたる屏風にて

懷德堂吟詠

竹内青心

懷德堂

袴のひだ爽かにして懷德堂

永田盤舟居士

秋天の高きを大阪町人よ

西村天囚先生

眞　率　の　訓　を　今　に　秋　涼　し

重建二十五年に際して（三篇）

△思ひつくまま

仲田應弘

松山直藏先生は、茶話會の席上で、懷德堂は民衆的大學だと云はれた。其の頃は、文學科、定日講義、素讀科があつた。私は山本楢信氏の斡旋で聽講する樣になつたのだが、山本氏に紹介して下さつたのは、山本氏の祖父梅川豐吉郎翁で、梅川翁は山本氏の宅で、私を紹介して下さつた。

私が初めて懷德堂へ行つた時は喜田博士の講演であつた。林森太郎先生は新古今和歌集を、松山先生は周易程傳を講じてゐられた。あれだけ廣い講堂で雜談する者もなく、講義中は水を打つた樣な靜肅さで、神神しい思ひさへ湧くのであつた。大阪の中央部で、これだけ靜かな所のあるのが不思議なくらゐであつた。中には酒に醉うて來られた人もあつたが、そんな人は程なく停めてしまつた。懷德堂の空氣には耐へられなかつたものと思ふ。

歸りの市電では松山先生は自宅からの距離をきかれたりして、種種激勵して下さつた。座席を讓つ